資料３

第７回審議会における審議状況

１　小中一貫型学校について

第７回審議会では、「小中一貫型学校」について議論が行われ、これまで複数回に渡り行われた議論も踏まえて、以下のとおり、審議会の方向性としてまとめた。

①　小中一貫型学校の設置は、小中一貫教育を推進し、ひいては子どもたちのよりよい成長のための１つの手段である。

②　交流授業等による異学年間の交流により、子どもたちの学習意欲の向上に繋がるほか、下級生に対する優しさや上級生への憧れといった学習面だけに留まらない多くの教育効果が期待できる。

③　区では、学びのエリアを核とした小中一貫教育を行っており、小中一貫型学校において学校や地域の事情を踏まえた特色ある学校づくりや先駆的な研究を進め、その取組や効果を学びのエリア内や全区的に波及させることにより教育の質を高めることができる。そのため、小中一貫型学校の効果的な配置や活用を検討する必要がある。

④　新たな選択肢である小中一貫型学校では、既存の課題解消のためだけではなく、義務教育９年間を通してめざす子ども像を示し、特徴的な取組を検討・推進することが重要な役割である。また、周辺小学校からの進学者と内部進学者との間で人間関係の構築に差が出ないように配慮する必要がある。

⑤　設置の検討にあたっては、学級数や通学区域が様々であることから、一概に整備条件を掲げることは難しいが、小学校と中学校の通学区域の整合性や就学傾向、通学距離及び通学にかかる安全性に考慮し検討することが望ましい。

２　施設内容・施設更新について

第７回審議会では、「施設内容・施設更新」についての意見の洗い出しが行われ、出された意見の整理等について、小委員会に付託された。
審議会で出された主な意見は以下のとおり。

<u>学習空間・学習環境についての意見</u>

①　審議会参考資料２（「新しい時代の学びを実現する学校施設の在り方について」最終報告イメージ例）では、個別最適な学びと協働的な学びを実現するための柔軟な学習空間を

実現するためのイメージを掲載しているので、今後の施設内容を検討するうえで、とても参考になる。

② 新しい学びへの対応なども踏まえて、子どもたちにどのような学びをさせるかによって、教室の作り方も変わってくると考える。授業形態は、従来の「同期・集合」した学びのスタイル（例：一斉授業）と ICT の活用による「非同期・分散」した学びのスタイル（例：GIGA 端末を活用したオンデマンド授業）とある中で、理解進度に応じた柔軟な学習環境が作れるようにしておくべきである。

③ 学習環境を作っていくにあたっては、余裕を持った学習スペースを確保する必要性も認識する必要がある。

④ 子どもたちの気付きはいつどこで出てくるかわからないので、例えば踊り場に机と椅子を置くなど、気付きを深めることができる場所も必要ではないか。また、交流を意識した動的な場所と静かに集中できる静的な場所を踏まえた内容を考えることも大事だと思う。

<u>その他の空間についての意見</u>

⑤ 40 年ぶりに 35 人学級編制へと変わったが、将来的にさらに別の形に変わることも考えられるので、変更可能な区画を意識する必要があるのではないか。

⑥ 板橋区は比較的築年数が経過している学校でもオープンスペースが用意されていたりするので、以前から学校の作りには意識をしているのだと感じる。

⑦ 子どもたちの安全面について、現場目線では、教員は学校施設の中で「死角（見えないスペース）」を一番気にするところであり、古くから建てられている学校は死角が多いと感じる。

⑧ より良い教育環境の検討をする際には十分なバックヤードを確保することも一つの視点だと思う。

<u>教員の意識についての意見</u>

⑨ オープンスペースを作る試みは以前から様々行われてきたが、上手く活用されない状況が多く見られる。教員の固定観念を払拭することで、新しい施設を有効に活用する意識が芽生えるため、教員の意識改革も必要である。

⑩ 現場の教職員にも学校全体を学びの空間として捉えて、豊かな空間の作り方の視点を持

ってもらうことが大事である。

更新時の視点についての意見

⑪　教育空間を設計する段階から学校や生徒などと連携を取りながら考えていくことで、より有効的な活用がされると考える。

⑫　今後、更新を迎える学校施設数を勘案すると、財政状況は厳しいと感じる一方で、少子化とはいえ、多種多様な子どもがいるため、改築ではなく改修レベルでも一人ひとりに寄り添った環境整備を進めていくことが必要である。

⑬　将来的に学齢人口の減少が予想される中で、例えば小学校２校と中学校１校を小中一貫型学校にするといった対応をしていくことで児童・生徒数と学校数のバランスは取れてくるのではないか。

⑭　親の立場としては、子どもたちは校庭や体育館などの遊びのスペースも大事であると思っており、スペースを確保するためには高層化改築も必要ではないかと感じる。また、高層化することにより緊急時の避難などで課題が出ることが予想されるが、中央図書館では、障がい者の方が集まるスペースを最上階に設けつつも避難経路を考えた設計を行っている実績があるので、施設の安心・安全は問題ないと考える。

⑮　長寿命化改修にあたっては、単に建付けを新しくするだけではなく、今日的な課題を踏まえて、学校の機能をいかに充実させるかが大事な視点であると思う。施設を維持しながら適宜見直していく考え方が求められている。